

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2001) 2巻1号:36-37.

エッセイ: 出会いの重さと痛恨の日々

笹森秀雄

エッセイ

出会いの重さと悔恨の日々

笹 森 秀 雄

相田みつをさんの詩集のなかに、確か「そのときの出逢いが 人生を根底から変えることがある よき出逢いを」という一篇があったと思うが、私がこんにちまで曲りなりにも研究者の末席に名を連ねることができたのは、正にこの詩が示すように、恩師鈴木栄太郎先生と関清秀先生との「出会い」と「導き」によるものであって、顧みて出会いの重さをしみじみ感ずるとともに、只々感謝の気持ちでいっぱいである。

私が新設の北大法文学部に入学したのは昭和24年4月で、旧制の第3期生ということであった。当初私は、法律学を専攻し、出来れば将来司法関係の仕事に就きたいと考えていたので、師範の先輩に当たるS氏（1期生で社会学を専攻）を訪ね、その意向を伝えた。ところが話は全く別の方向に進んだ。先輩がいうには、「現在アメリカでは社会学はアメリカン・サイエンスといわれ、大変評判の学問であり、日本でも近々そうなるだろうし、特に北大の社会学講座には日本農村社会学の生みの親であり、かつ世界的にも著名な鈴木栄太郎という先生がおり、またその下に新進気鋭の関清秀という若い先生がおられるので、ここは私に騙されたと思って、社会学を専攻することにしなさい。ただ鈴木先生は赴任されて以後ずっと体調を害され、今なお入院中なので、私がお都合を伺い、君を先生に紹介してあげよう」とのことであった。先生の病室を訪れたのはその4、5日後のことであったが、はじめてお目にかかった先生は、全く白髪の、しかも口髭をたくわえておられ、一見「仙人」を思わせる風格の方であった。そしてようやく聞きとれる程の声で、「よく訪ねて来てくれました。大変うれしく思います。これから一緒に勉強しましょう。楽しみにしております」と話された。私はその瞬間、何かに憑かれたかのように、無意識のうちに、「有難うございます。社会学を勉強したいと思いますので、よろしくお願い致します」と答えていた。全く夢のような出来事であった。

入学当時の社会学研究室は、鈴木先生が入院中ということもあって、講義と学生指導は関先生がおひとりで当たっていた。鈴木先生が病魔と闘いながら、われわれ学生に対して社会学特殊講義として「都市社会学」の講義を始められたのは、先生が北大に赴任されてから5年目の秋を迎えられた昭和26年9月21日からであった。それはわれわれ3期生にとって、鈴木先生から聞く文字通り最初の講義であり、入学してから3年目の秋のことであった。「恐らく今年も講義は無いだろう」と半ば諦めかけていた学生にとっては、開講は正に夢のような出来事であり、朝から緊張と興奮とそして一抹の不安をもちながらその瞬間を待ち続けたことを、今でもはっきりと覚えている。「今年こそは」「今年こそは」と待ち続けながら、遂に先生の講義を聞くことなく大学を終えていった1期生・2期生に比べると、われわれ3期生はたとえそれが半年だけであったとしても、直に先生の講義に接し得たという点では、確かに果報者であったとってよかろう。特に私の場合は、卒業と同時に助手に採用され、先生が退官される33年3月まで、引続いて先生の講義に列するという幸運に恵まれたので、果報者のなかでも特段に果報者であったと思っている。

鈴木先生が退官された以後の研究室は、新鮮でしかも学問的活気に充ち充ちていた。当時の研究室の潮流は、貧困研究、母子世帯の研究、農村及び都市研究と、実証的研究傾向が強く、したがってわれわれ学生もその影響を大きく受け、それらの研究への参加を通じて、社会調査の方法を身をもって体験したことは、卒業論文の作成はもちろん、その後の職業活動においても極めて有益であった。

先にも触れたように、私は3年間の学生時代と5年間の助手時代を通じて、鈴木先生からは村落研究と都市研究の理論と方法を学び、また関先生からは当時わが国において未踏の研究領域とされていた地域社会学 (Regional Sociology) の輪廓を学んだ。このことが、

私の以後の研究方向をほぼ決定づけたといつてよい。私の関心は、最初は村落と都市に向かい、中間は地域(Region)に移り、そして最後はまた都市へと回帰したが、いずれの時期の研究も、みなそれぞれ苦勞があり、それだけに思い出深いものが多い。しかしそれらのなかにあつて、特に「漁村聚落の社会構造に関する実証的研究」(卒業論文、昭和26年12月提出、400字詰原稿用紙520枚)と「都市における社会関係に関する実証的研究」(「社会学評論」22号、昭和30年)の2つは、私が卒業と同時に助手に採用され、また引き続き研究者としての道を歩むことを保証された、いわばその切掛となつた研究であつて、私にとって生涯忘れることのできない思い出の勞作である。

鈴木先生と関先生との出会いから既に50年の歳月が過ぎた。この間、鈴木先生は昭和33年4月退官により東京に帰られ、東洋大学教授として新しいスタートをきられた。関先生は鈴木先生の後を継ぎ2代目主任教授となられたが、昭和52年4月新設の大学院環境科学研究科の科長に榮転され、社会学講座を去られた。関先生は今も頗るご壯健であるが、鈴木先生は昭和41年9月20日、成城の丘に初秋の風が渡る日、そして小さなお庭をこよなく愛された狛江のお宅で、眠るように72年の生涯を閉じられた。弟子達の悲しみは言語に絶するものがあつた。

弟子4人(笹森秀雄・富川盛道・藤木三千人・布施鉄治)によつて「鈴木栄太郎著作集編集委員会」が組織されたのは、先生の死去から1年後のことであつた。われわれ編集人の仕事は、まず先生の論文や著書を手元に集めることから始まつたが、「日本農村と家族の調査ノートとモノグラフ」及び「朝鮮社会」に関する諸論文は、戦前戦後にわたる激動期のなかで書かれたため、先生御自身のお手元にもないといった有様で、大變な苦勞であつた。しかし布施鉄治先生(故人)の超人的な努力と未来社の特段のご好意によつて、10年間に待望の全8巻を刊行し終えたことは、学界に対する貢獻は云うに及ばず、何よりも先生に喜んでいただけることを思い、我々一同杯を捧げて心からお祝いをした次第である。

しかし、そうした喜びの渦中にあつて、私だけは特に著作集第7巻(社会調査)に対し、特別の感概をもつていた。というのは、第7巻に収録されている先生の遺稿「都市社会調査法ノート」は、本来ならば「農村社会調査法」(喜多野清一と共著)の姉妹編とし

て、既に先生ご存命中に「都市社会調査法」(笹森秀雄と共著)の形で刊行されているべき筈のものであつた。それが実現せずに終わったのは、全く私自身の怠慢によるものであつて、かえすがえす慚愧の念でいっぱいである。ただ最後に、(注)として「本稿は笹森秀雄との共著で公刊予定であつた博士の未完の遺稿である。第1節は博士自らの手になるもの。第2節・第3節は博士の口述を基にして編集者の一人である笹森秀雄が所有するノートによつてゐる。その経緯については、月報の笹森秀雄「都市調査法ノートについて」を参照されたい」と記して下さつたのは、編集委員の方々の恩情によるものであつて、深く感謝している。恐らくこの論文を読むたびに、打合わせの数々の思い出と同時に、約束を果たし得なかつたことに対する強い呵責の念と悔恨の念に襲われ続けるものと思う。一生の不覚であつたと思つてゐる。

私は7年前から体調を害し、今は残念ながら現地調査に参加できる環境にない。したがつて私の最近の研究は、すべて机の上の仕事に限られてゐる。特に十数年前に発表した「シカゴ学派の衰退と再生」のなかで取り残した諸問題を、約束通り完全な形に仕上げたいと思つてゐる。もちろんこの仕事は正直いつ完成するか定かでない。しかしとにかく馬齢に鞭打ち、一日でも速く決着をつけたいものと考えてゐる。

(旭川医科大学名誉教授・社会学)